

2017年8月31日 9月2日付記

『隠州視聽合記』と『改正日本輿地路程全図』における竹島の記述・描写に関する私見 補遺2

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

長久保赤水は、中国歴史地図集である『唐土歴代州郡沿革地図』に含まれる「亜細亜小東洋図」のなかにも「竹島」「松島」を書き入れている。日本だけを正確に描こうとした『改正日本輿地路程全図』と異なり、「亜細亜小東洋図」はユーラシア東方の地理的構成（とくに中国[明国]、朝鮮、安南、日本の四カ国が中心）を大まかに示そうとしたものであり、周辺部は不正確かつ怪しげであり、ディテールは曖昧である。そのため、小さな島々の帰属について語る情報源としてはそもそも適切なものではない。ただ、その地図表現（彩色）の変遷には若干興味深い点が無きにしもあらずであるので、ここに概観しておく。

『唐土歴代州郡沿革地図』の刊記のある版本としては、寛政2年版（1790年、東都：青黎閣伊八；申椒堂市兵衛、東京大学史料編纂所図書室）、文政12年版（1829年、東都：青黎閣；慶元堂、早稲田大学図書館特別資料室）、天保6年版（1835年、浪華書林：伊丹屋善兵衛；河内屋喜兵衛、《神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ住田文庫》）、安政4年版（二宮醒軒による模倣版、1857年、積玉圃河内屋喜兵衛；文栄堂伊丹屋善兵衛、《早稲田大学古典籍総合データベース》）が知られる。寛政2年版のみ赤水存命中の出版である。

いずれも中国、朝鮮、安南、日本の色を塗り分けることで各国を区別している。遠く離れていて誤解の可能性のない朝鮮と安南は同じ色である。

寛政2年版は、上記各国の主要部のみ彩色する方針のようであり、「松島」「竹島」、屋久島、琉球諸島、台湾、朝鮮半島周辺の島々、中国沿岸の島々などはすべて彩色されていない。そのため、「松島」「竹島」は日本の色でも、朝鮮の色でもない。

文政12年版、天保6年版、安政4年版では、「松島」「竹島」は日本と同じ色、朝鮮とは異なる色で彩色されている。朝鮮半島の周辺の島々は朝鮮と同じ色である。また中国沿岸の島々や台湾は中国と同じ色で彩色されている。これらの地図に彩色を施した人が、「松島」「竹島」が朝鮮に属していないと考えていたことは明らかであろう。しかし、この地図表現が、「松島」「竹島」が日本に帰属することを明示しているとも実は言い難い。これらの地図では、琉球諸島も日本と同じ色で塗られている。さすがに、この時点で琉球が日本の一部であると考えられていたわけではないのではあるまいか。せいぜい中国の沿岸の島々や台湾とは異なる位置づけにあるという区別を示そうとしたという程度のことではないか。すなわち、この地図の彩色においては、日本と同じ色であるということが即座に日本であるということを表現しているとは言い切れなように思われる。

これらの地図の彩色から島嶼の帰属を考えることは困難であろう。

## 付記

以上は、「亜細亜小東洋図」諸版の地図表現（彩色）のみから読み取りうることについて検討したものである。

しかし、長久保赤水の地理観の表現という点からは、別の推論も可能であろう。本篇での考察が妥当であれば、「亜細亜小東洋図」に先行して作られた『改正日本輿地路程全図』において、赤水は「松島」「竹島」が日本であることを明示している。日本図よりかなり縮尺の小さい「亜細亜小東洋図」において、「松島」「竹島」のようなごく小さな島を地名つきで赤水が敢えて書き込んだのは何故か？「松島」「竹島」が海域アジアの政治空間において極めて重要な地点であると赤水が考えていたからであろう。なぜ重要であるのか？それは、「松島」「竹島」が日本の端を示すものにほかならないからであろう。

やや想像を逞しくすれば、『唐土歴代州郡沿革地図』を読むような知識人も、如上の赤水の地理観を理解した上で、この地図を解釈していた可能性は高いであろう。